

ワンダー暗号ランド

■ パズルつき・暗号推理小説傑作選

■ 長田順行編



|編者|長田順行 1929年広島県生まれ。海軍兵学校、広島大学卒。日本における暗号研究の第一人者。著書=「暗号」、「暗号と推理小説」、「西南の役と暗号」、「秘文字」(編)、他多数。

ワンダー暗号^{あんごう}ランド パズルつき・暗号^{あんごう}推理小説傑作選

長田順行^{ながたじゆんこう} 編

© Junko Nagata 1986

昭和61年7月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183783-4 (0)

講談社文庫

ワンダー暗号ランド

パズルつき・暗号推理小説傑作選

長田順行 編

講談社

目次

読者へ

序文

琥珀のパイプ

三色の告発

掘出された童話

貨車引込線

あるエープリール・フル

死句発句

立女形失踪事件

詩と暗号

黒手組

源内焼六術和尚

〈暗号パズルに挑戦しよう〉(出題 日本暗号協会)

A 暗号① 65 暗号② 66 暗号③ 135 暗号④ 162

中島河太郎

6

甲賀三郎

9

斎藤 栄

40

泡坂妻夫

67

樹下太郎

136

佐野 洋

148

幾瀬勝彬

163

戸板康二

192

木々高太郎

226

江戸川乱歩

254

小栗虫太郎

285

暗号⑤ 191 暗号⑥ 253 暗号⑦ 284

B 懸賞暗号に挑戦を 371

☆モールス符号表 65

☆コーヒー・ブレイク数字だけの短歌 147

解説（暗号入門／推理小説と暗号／作品解題） 長田順行 337

「源内焼六術和尚」中の暗号解説例（二瓶 寛） 364

〈暗号パズルA 解答編〉 329

扉イラスト／建石修志

ワンダー暗号ランド
パズルつき・暗号推理小説傑作選



読者へ

本書に収録の暗号推理小説十編のうち六編のあとに、その直前の作品中で使われた暗号の応用問題として、七つの暗号パズルが出題されています。収録の各暗号推理小説の名作を味読しつつ、七つのパズルにも挑戦してください。これらの暗号パズルを解読すれば、三七一ページに出題されている懸賞つき暗号問題を解くヒントになる文章があらわれます。

第一の暗号から第七の暗号までの解答は、三二九ページ以下の袋とじ部分に掲載されていますが、封を切る前に、ぜひ自力で解読を試みてください。解読のためのその努力とひらめきの訓練が、懸賞つき暗号を解くのに役に立つはずです。多くのかたの応募をお待ちします。（問題はすべて日本暗号協会作成。応募方法、賞品等については、懸賞問題文のあとに示してあります）

なお、「源内焼六術和尚」には、著者も未解読のままにしている暗号が出てきますが、巻末の解説と二瓶寛氏の解説例を参考にして、鬼才小栗虫太郎が残した謎に、あなたも挑戦してみてください。

ご健闘を期待します。

序

中島河太郎

早い時期から探偵小説に親しんでいたものには、「黄金虫」や「奇巖城」、「二銭銅貨」などで、暗号は懐しい存在であった。

江戸川乱歩は学生時代から暗号に興味を示して、「暗号記法の分類」でその研究の成果を纏めるほど熱を籠めていた。暗号のアウトラインはこのエッセイに尽くされているかのように思えて、その後の進展は見られなかった。

当時の作家にしても、せいぜい甲賀三郎が関心を寄せただけで、昭和中期になって小栗虫太郎と木々高太郎が暗号を扱った。殊に小栗は探偵作家随一の暗号通であり、暗号を扱ったものが十三篇に及んでいるのだから、その執着の程度が窺えよう。

いったん衰微したかと思われた暗号小説は、戦後になって復活した。横溝正史をはじめ十数人の作家が手がけて妍けんを競っている。こういう盛況にもかかわらず、暗号研究は乱歩から一步も踏みだしていいと思っていれば、豈たはからんや、防衛の方面に立派な専門家が存在していたのである。

なるほど外交や国防、貿易などの部門では、秘密を要することが多々あるだろうし、それに関連して暗号理論や技術が、往年に比べて格段に飛躍していようとは、思ひも寄らなかったのである。推理小説だけの狭い視野のなかで、戦後は暗号小説が増えてきたなどという観察はまったく

おこがましい次第であった。

長田順行氏が暗号関係のエッセイを各誌に寄稿されるようになったのは、昭和五十年ころだが、その一篇「探偵小説と暗号」は、小栗虫太郎の作品の原典を追究して、多年にわたる疑問を氷解してくれた。それから編者は暗号学の造詣を駆使して、推理小説と暗号との交渉にメスを入れ、これまでの迷妄を一挙に晴らして下さった。

その後、精力的に暗号小説を渉獵して、戦前戦後の作品から十篇を精選したのが本書である。暗号ミステリーのアンソロジーとして、すでに渡辺剣次氏の編んだ「13の暗号」があるが、長田氏はそれとの重複を避け、それに漏れた秀作と、その後の成果に目を配っている。

しかも作品を収録しただけでなく、その間に暗号パズルを配し、小さな読物まで添えた心くばりは懇切である。

さらに「暗号入門」や「暗号と推理小説」を含んだ解説は、本書が一通りでないアンソロジーであることを有力に語っている。これまであまりにも一般読者に疎遠であった「暗号」について、少しでも蒙を啓きたいという編者の熱意の表われであろう。

小栗虫太郎の「源内焼六術和尚」は、とうとう作者が解読を示さずに終ったが、一つの解答例を挙げて、さらに新鮮な答えを要望する試みも斬新である。

編者はこれまでの十年、「暗号」の理解と啓蒙のために、身を挺してこられた。まさに孤軍奮闘というべきであった。だが、ようやく機運に際して、本年六月、氏の尽力によって日本暗号協会が設立されることになった。その先触れとしての本書の刊行は時宜を得たというべきである。

暗号研究の進展と、暗号趣味の普及を心から願ってやまない。

琥珀こはくのパイプ

甲賀三郎

私は今でもあの夜の光景ありさまを思い出すとゾツとする。それは東京に大地震があつて間もない頃であつた。

その日の午後十時過ぎになると、果して空模様が怪しくなつて来て、颱風の音と共にポツリポツリと大粒の雨が落ちて来た。その朝私は新聞に『今夜半颱風帝都に襲来せん』とあるのを見たので役所にいても終日氣に病んでいたのだが、不幸にも氣象台の観測は見事に適中したのであつた。氣に病んでいたというのはその夜十二時から二時まで夜警を勤めねばならなかつたからで、暴風雨中の夜警というものは、どうも有難いものではない。一体この夜警という奴は、つい一月ばかり前の東部の大震災から始まったもので、あの当時あらゆる交通機関が杜絶して、いろいろの風説が起つた時に、焼け残つた山ノ手の人々が手に獲物を持って、いわゆる自警団なるものを組織したのが始まりである。

白状するが、私はこの渋谷町の高台から遙かに下町の空に、炎々と漲ぎる白煙を見、足許には

道玄坂を上へ上へと逃れて来る足袋はだしに泥々の着物を着た避難者の群れを見た時には、實際この世はどうなる事かと思つた。そうしていろいろの恐しい噂に驚かされて、白昼に伝家の一刀を横たえて、家の周囲^{まわり}を歩き廻つた一人である。

さてこの自警団は幾日か経つてゆくうちに、漸く人心も落ち着いて来て、何時^{いつ}か兇器を持つ事を禁ぜられ、やがて昼間の警戒も廃せられたが、さて夜の警戒というものは中々止めにならないのである。つまり自警団がいつか夜警団となつた訳で幾軒かのグループで各戸から一人ずつの男を出し、一晚何人という定めで、順番にそのグループの家々の周囲を警戒するので、後には警視庁の方でも廃止を賛成し、団員のうちでも随分反対者があつたのであるが、投票の結果は何時も多数で存続と定まるものである。私の如きも××省の書記を勤め、もうやがて恩給もつこうという四十幾つの身で、家内に外に男とてなし、頗る迷惑を感じながら、凡そ一週間^{およ}に一度は夜中に拍子木を叩かねばならないのであつた。

さてその夜の話である。十二時の交替頃から暴風雨^{あらし}はいよいよ本物になつて来た。私が交替時に少し遅れて出て行くともう前の番の人は帰つた後で、退役陸軍大佐の青木進也と、新聞記者と自称する松本順三という青年との二人が、不完全な番小屋に外套を着たまま腰をかけて待つていた。この青木というのはいわばこの夜警団の団長という人で、記者は——多分探訪記者であらう——私の家の二、三軒さきの家へ下町から避難して来ている人であつた。夜警団の唯一の利益というべきものは、山ノ手のいわゆる知識階級と称する、貝殻——大きいのは榮螺^{きざえ}位小さいのは蛤^{はまぐり}位の——みたいな家に猫の額よりまだ狭い庭を垣根で仕切つて、隣の庭がみえても見えない

振りをしながら、隣同士でも話をした事のないという階級の、習慣を破ってとにかく一区劃内の主人同士が知り合いになったという事と、それに各方面から避難して来ている人々も加わって来るので、いろいろの職業に従事している人々から、いろいろの知識が得られるという事であらう、——然しこの知識はあまり正確なものではないので後には「ああ夜警話か」といったような程度で片付けられるようになったが。

青木は年輩は私より少し上かと思われる人だが、熱心な夜警団の支持者で、兼ねて軍備拡張論者である。松本は若いだけに夜警団廃止の急先鋒、軍備縮小論者というのであるから、たまらない。三十分置きに拍子木を叩いて廻る合間にピュウピュウと吹き荒んでいる嵐にも負けないような勢いで議論を闘わすのであった。

「いや御尤もじゃが」青木大佐は言った。「とにかくあの震災の最中（さいちゆう）にじゃ、竹槍や抜刀を持った自警団の百人は、五人の武装した兵隊にしかなかったのじゃ」

「それだから軍隊が必要だとはいえますまい」新聞記者は言った。「つまり今迄の陸軍はあまりに精兵主義で、軍隊だけが訓練があればよいと思っていたのです。我々民衆はあまりに訓練がなかった。殊に山ノ手の知識階級などは、口ばかり発達してお互いに人の下につく事を嫌がりまるで団体行動など出来やしない、自警団が役に立たないという事と、軍隊が必要であるという事は別問題です」

「然し、いくら君でも、地震後軍隊の働いた事は認めるじやろう」

「そりゃ認めますとも」青年は言った。「けれども、その為に軍備縮小は考えものだなんていう

議論は駄目ですよ。一体今度の震災で物質文明が脆くも自然に負かされたという議論があるようですが、以つてのほかの事です。吾人の持つてゐる文化は今度の地震位で破壊せられるものじゃありませんよ。現にビクともしないで残つてゐる建物があるじゃありませんか、吾人の持つてゐる科学を完全に適用しさえすれば、ある程度まで自然の暴虐に堪える事が出来るのです。吾人は本當の文化を帝都に布^しかなかつたのです。恐らく日露戦役後に費やされた軍備費の半ばが、帝都の文化施設に費^{つか}われていたら、帝都も今回のような惨害は受けなかつたでしょう。もうこの上は軍備縮小あるのみですよ」

私は青年のこの大議論を、うとうとと暴風雨の音とチャンポンに聞きながら、居眠りをしてゐた。所が突然青木の大きな声が聞えたのでスツカリ眼を醒まされた。

「いや、どうあつても夜警団を廃する事は出来ない。ことにじゃ善悪はとにかく、どの家でも犠牲を払つて夜警を勤めているのに、福島という奴は怪^けしからん奴じゃ。あんな奴の家は焼き払つてしまふがよい」

大佐は夜警問題で又松本にやり込められたのであろう。その余^{まづかり}沫を、いつも彼の嘲罵の的になつてゐる福島という青木の家と丁度背中合せて、近頃新築したかなり大きい家の主人に向けたものらしかった。

私は吃驚^{びっくり}して、喧嘩にでもなれば仲裁に出ようかと思つてゐると松本の方で黙つてしまつたので何事も起らなかつた。

そして一時三十五分過ぎ、二人は私を小屋に残して最後の巡廻に出かけた。暴風雨は正に絶頂

に達したかと思われた。

一時五十五分なせこんなに正確に時間を覚えてるかという、小屋には時計があつてほかに仕事がないので何かあるときと時計をみるからである——拍子木を叩きながら松本一人が小屋に帰つて来た。聞けば青木は一寸家に寄つて来るというので、彼の家の前で別れたそうであつた。二時に青木が帰つて来た。まもなく次の番の人達がやつて来たので、暫く話してから私と松本は番小屋から左へ、青木は右へと別れたのである。私達がちょうど自宅の前あたり迄来た時に、遙かに吹き荒ぶ嵐の中から人の叫声を聞いたと思つた。

二人は走り出した。番小屋の人も走り出した。見ると青木大佐が夢中で火事だ！と叫んでいる。私はふと砂糖の焦げるような臭を嗅いだ。砂糖が燃えたなと思つた。我々は近所から駆けつけた人々と共に、かねて備えてつてあるバケツと水を汲んで嵐の中を消火に力めた。

大勢の力で火は大事に至らずして消し止めたが、焼けたのは問題の福島の家であつた。台所から発火したものらしく、台所と茶の間女中部屋を焼き、座敷居間の方には全然火は及ばなかつたのである。

働き疲れた人々は大事に至らなかつた事を祝福しながら、安心の息をついていた。私は家内があまり静かなので、変に思つて懐中電灯を照しながら、座敷の方へ這入つて行くと、ちょうど居間との境とも思われる辺に、暗黒な塊が横たわつていた。

電灯を照すと確かに一人の男であるという事が判つた。私は次の瞬間に思わずアッ！と声をあげて二足三足後退したのである。死体だ！ 畳は滴る血汐でドス黒くなつてゐる。

私の叫び声に、漸く火を消し止めてホツとしていた人々がドヤドヤと這入って来た。

人々の提灯によって、確かにそれが惨殺せられた死体である事が明らかにした。誰一人近づくものはない。その中、誰かが高く掲げた提灯の光りで奥の間をみると、そこには既に寢床が設けられてあったが、一人の女と小さな子供が床の外へ這い出したような恰好で、倒れているのが見えた。まもなくそこに集った人々の口から、死者はこの家の留守番の夫婦と、その子供である事が判った。福島の家は全部郷里の方へ避難してしまい、主人だけは残っていたのであったが、それも何でも今日の夕方に郷里の方へ帰ったそうである。

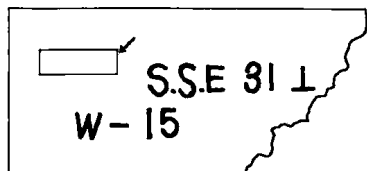
私はこういう人々のささやきに聞き耳を立てながら、ふと屍体の方を見ると、驚いた事には、いつの間にか松本がやって来て、まるで屍体を抱きかかえるようにして調べていたのであった。その調子が探訪記者として、馴れ切っているという風であった。

彼は懐中電灯を照しながら、奥の間へ這入りなおも詳しく調べていた。私はその大胆さには全く敬服してしまった。

そのうちに夜も白々と明けて来た。

やがて松本は死体の方の調査がすんだとみえて、奥の間から出て来たが、私が側にいるのも目にくれず今度は居間の方を見廻した。私も彼の目を追いながら、いくらか明るくなつて来た窓を見廻すと、気のついた事は隅の方の畳が一枚上げられ床板が上げられていた。松本は飛鳥の様にそこへ飛んで行った。私も思わず彼の後を追った。

みると床板を上げた辺に一枚の紙片が落ちていた。目^め敏^{びん}くその紙片を見つけた松本は、一寸驚



いた様子で、一度拾おうとしたが、急に止めて今度はポケットから手帳を出した。私はそつと彼の横から床の上の紙片を覗き込むと、何だか訳の判らない符号みたいなものを書いてあった。それに彼の手帳を見ると、もう紙片と同じ符号がそこに写されているではないか。

「やあ、あなたでしたか？」私の覗いているのに気のついた松本は急いで帳面を閉じながら言った。「どうです。火事の方を調べて見ようじゃありませんか？」

私は黙って彼について焼けた方へ歩いた。半焼けの器物が無惨に散らばって、黒焦げの木はブスブスと白い蒸気を吹いていた。火元は確かに台所らしく、放火の跡と思われる様な変った品物は一つも見当らなかった。

「どうです、やはり砂糖が焦げていますね」松本の示したものは、大きな硝子製の壺の上部がとれた底ばかりのもので、底には黒い色をした板状のものが、コビリついていた。私は内心にあの青木の叫び声を聞いて駆けつけた時、「砂糖が焦げたのだなあ」と独言を言ったのを、ちゃんと聞いていたこの青年の機敏さに、驚きながら、壺の中のものには砂糖の焦げたのに相違ない事を肯定するほかはなかった。

彼はあたりを綿密に調べ出した。その中に、ポケットから刷毛を出して、手帳を裂いた紙の上へ何か床の上から掃き寄せていたが、大事そうにそれを取り上げて私に示した。それは紙の上をコロコロころがっている数個の白い小さな玉であった。